

溝をのぞきこんで

野坂 悦子

翻訳には、さまざまな形で関わってきた。オランダ語、英語、フランス語の子どもの本を日本語にする仕事。日本の文化である紙芝居を外国語にする仕事。母国語が日本語である以上、やはり「日本語に訳す」ほうが、私の本領である。できあがった和訳を作品として読み通し、独り立ちしていたときの嬉しさは格別だ。

とはいえ、外国語に訳すほうの仕事も大切にしている。その場合は、目ざす言語を母国語にするネイティブと組んでとりかかるとは、日常的な表現ほど訳すのが難しい。「この日本語は、このオランダ語は、翻訳できない……」と立ちすくむことが多いのは、言葉の影にそれぞれの国の国民性や文化、感覚の違いがひそんでいるからだ。

翻訳に向かうたび、言葉のあいだに横たわる「翻訳不能」の溝に放りこまれるわけで、そこからどう這いあがるか、翻訳者は意識的にせよ無意識的にせよ、格闘せざるをえない。同時にそこが、翻訳の面白さでもある。

本稿ではオランダ語の絵本、児童文学と、紙芝居の例を取りあげ、皆さんといっしょに「翻訳とは何か」考えてみたい。

最初は、赤い表紙が印象的な『ぼくの！』（マチルデ・ステイン文、ミース・ファン・ハウト絵 光村教育図書）という絵本について。この本の主人公は、とつぜんメレルの家にあって、メレルを困らせていたそのおぼけが、すこし成長して自分の家に帰るまでを描いた作品である。家にもどったおぼけから届いた手紙に「ぼくのメレルちゃんに」と書いてあるところが、言葉遊びになっている。

タイトルのオランダ語は *van mij*。手紙にも *van mij* と書いてあって、その「ぼくの」は一見オランダ語に忠実な訳なのだが……実は意識になっている。オランダ語の手紙に *van* とあれば、差出人を示す前置詞として「から、より」と訳するのが普通だ。したがって正しい和訳は、「ぼくからメレルちゃんに」となる。でもそれでは、せっかくダブル・ミーニングで、*van mij* を使った作者の遊び心が活かされてこない。この絵本を手にする日本の子どもたちにも、オランダの子どもたちと同じように、最後にクスマッと笑ってもらいたい。そう願って、「ぼくのメレルちゃんに」と訳すことに決めた。絵本の世界では、作者の意図